

A1.9

[参考訳]

世界中の多くの国で、国家がその国民に自発的に臓器提供者になるかどうかを問うことは一般的なことである。現在、臓器移植は多くの人々の強い感情を引き起こす問題の一つである。一方で臓器移植はある人の死を他の人の救済にする機会ともなっているが、他方で臓器移植は自分の臓器について関与しない計画を立てることともなるために大いに厄介なのである。それゆえ、人によって異なった決定を下すことは驚くべきことではないし、臓器の提供率が国によってかなり異なることも驚くべきことではない。しかし、国ごとの違いがどれ程のものかを知るとあなたは驚かざるを得ないだろう。数年前に実施された研究で、二人に心理学者 Eric Johnson と Dan Goldstein は、臓器提供に合意している割合はヨーロッパ諸国間でも 4.25%の定率から 99.98%という高率まで様々であることを示した。これらの違いについてより衝撃的なのは、提供率が全体に散らばっているわけではなく、2 つのはっきりとしたグループとしてかたまっていたことであった。すなわち一方のグループは提供率が桁か 10%台、もう一つは 90%台後半というものであり、その中間層はほとんど存在しなかったのである。

どうすればこのような大きな違いを説明できるだろう。これは、この研究が発表されて間もなく、大学の優秀なクラスで発した質問である。実際に私が彼らに考えて貰ったのは二つの匿名の国、A と B についてであった。A 国では約 12%の国民が臓器提供者になることに同意している。一方 B 国では 99.9%が同意している。それではこの二カ国について、両国の国民の選択を説明するものとして、異なっていると彼らが考えたものは何だっただろうか。学生たちは賢明で創造的でもあったので、多くの可能性に思い当たった。多分、一方は世俗的でもう一方は非常に信心深い。あるいは一方は他方より医療がより高度に進んでいて臓器移植の成功確率が高い。あるいは一方は事故死の率が高く、結果として利用可能な臓器が多い。あるいは一方はかなり社会主義者的な文化を持っていて共同体の重要性を強調するが、もう一方は個人の権利を重視する、などである。

すべて良い説明だった。しかしその後がうまくない。A 国は実のところドイツで B 国はオーストリアだった。私の哀れな学生たちは混乱した。いったい全体、ドイツとオーストリアで何がそれほど違うのか。しかし彼らは諦めなかった。おそらく自分たちの知らない法的、教育上の違いがあるのでは？あるいは、かつてオーストリアでは臓器移植を促すような重要な出来事やメディアのキャンペーンがあったのだ。あるいは、これは第二次世界大戦と関係があったりして？はたまたオーストリア人とドイツ人は自分たちが思うより似ていないのだ。生徒たちには違いを説明する理由がわからなかったが、それが非常に重要であることは確信していた。たまたまこのような極端な違いを理解できないのか、いや、違う。予想だにしない理由でこれは理解できるのである。全能力を傾けても、学生達はその理由にたどり着くことは出来なかった。真の理由は実際、馬鹿げたほど単純なものである。すなわち、オーストリアでは既定としての選択が臓器提供者になることであるのに対してドイツでは臓器提供者にならないことである、という点である。この政策上の違いは些細なものに思われる。「簡潔な形式でメールしなければならない」ということと「その必要はない」ということとの違いのようなものだ。しかし提供率を 12%から 99.9%に押し上げるのには十分なのである。そしてオーストリアとドイツに当てはまっていたことは全ヨーロッパについても当てはまっていた。臓器提供率の非常に高いすべての国が opt-out 政策を採用し、低い国はすべて opt-in 政策を採用していたのである。

[解答例]

1.
X: rates Y: different
2.
(ア)A (イ)C (ウ)C
3.
ヨーロッパでは、国民の臓器提供の意思表示率が桁台か 10%台の国と、90%台後半の国とにはっきり分かれており、中間に位置する国がほとんどなかったこと。
4.
あるいは一方は事故死の率が高く、結果として利用可能な臓器が多い
5.
オーストリアでは意思表示をしなければ臓器提供に同意したとされ、ドイツでは意思表示をしなければ臓器提供に同意していないとされるから。